

〈場〉とはなにか
—主要な理論と関連する概念についての学際的考察—

Ba: An Interdisciplinary Discussion of
Major Theories and Related Concepts

河野 秀樹
Hideki KONO

Abstract

This study reviews existing major discussions about *ba* and related theories, and explores the implications that they commonly suggest concerning the fundamentals of *ba* and its functions.

While the concept of *ba* has been discussed as a symbolic notion in explaining the patterns of human relations in Japanese society by domestic scholars, similar notions are found in studies of various fields in the world. In fact, studies of *ba* and other equivalent notions exist not only in the humanities but also in natural science, as in the studies of magnetic fields and the quantum field theory. In this theoretical study, I will provide an overview of the major theories of *ba* and other similar concepts, and discuss their uniqueness and commonalities from an interdisciplinary perspective to delineate the essence of *ba*.

キーワード：場、場所、存在論、日本文化論、複雑系

Key Words : *ba*, basho, ontology, Japanese culture, complex system

0. はじめに 背景と目的

現代社会の抱える様々な問題が深刻さを増すなか、人間と世界との関わりを根本から見直すことによって、その可能な打開策について新たな方向性を見出すべく澎湃たる議論が世界的に起きている。そのうち、人間の存在と行動の基本的原理を個人に還元する考え方を離れ、環境との関係のなかにこれをもとめる動きが大きな流れの一つになっているように思われる。各界の第一線をいく識者のなかにも、経済、環境、社会に関わる諸問題に通底する要因として、他と切り離された〈個〉としての我々自身の存在の定義に立った世界観の限界があることを認め、

共同体への回帰などに代表される関係性重視のパラダイムへの転換を標榜する者が珍しくない。

しかしながら、人間存在をそれ自体自己完結的に独立したものとみなす代わりに、個人を取り巻く環境との関係に基づくものと認め、その行動を環境に内在する様々な要因を明らかにすることで説明しようとする立場は、現代の限られた論者によってのみとられてきたものではない。これまで多くの社会で、自然環境や共同体における様々な事象が個人の存在と深く結びついたものとみなされてきたことは、文化人類学者達の指摘を待つまでもないことである。このうち、日本社会では、伝統的に〈場〉の概念が個人と社会の関係を取り持つ基本的な原理として機能してきた。中根(1967)の言うように、それは日本人にとって自己の社会的存在そのものであり、その行動原理の核をなすものであった。伝統的村落型共同体が少数となった現代の日本においても、〈場〉の感覚は連綿として受け継がれ、「場の空気を読む」といった表現となってあらゆる世代の日本人の行動に大きく影響し続けている。

学問の対象としての〈場〉に目を転じると、その意味するものは扱われる分野により多様であることがわかる。また、類似する概念は日本以外にも存在し、哲学、自然科学、社会科学において古今にわたり登場している。当然ながら、〈場〉の概念は扱う目的、視座によってその意味は大きく異なるため、それぞれの文脈で理解されるべきものであるが、一方、個物や個人を包含し、全体性を創り出す原理としての〈場〉の作用の理解は、各分野において共通するようには思われる。形はないものの、現実には物体や生き物の行動に作用し、時世を超えて我々の生活場面に登場する、この〈場〉の本質とはいったい何なのか。本小論では、人間を含むものとその環境との関係を取り持つ原理としての〈場〉の概念が、これまで様々な学問分野でどのように捉えられ論じられてきたかを概観し、その思想上の意義を論じるとともに、〈場〉の本質とは何かについて学際的視点から考察する。

1. 〈場〉の基本概念

広辞苑(新村編 2008)によれば、日常生活の文脈において言及される〈場〉の主な意味とはつぎのようなものである。

- ① 物事の行われる広いところ。場所。
- ② 物事の行われる時機・局面。ばあい。

〈場〉の概念の根本に関係するのは、〈場〉という字そのものを内包する〈場所〉である。上の定義のうち①では、両者はほぼ同じものと見なされていることがわかる。②ではこれが転じて、〈場〉とは単なる物理的空間を超えて、場面、機会といった、ある要因により区切られた特定の時空間を表すものとして捉えられ得ることが示唆されている。この定義では〈場〉は明らかに場所とは異なり、個人の中に存在しながら他者とも共有される、選択的に知覚された時空

間の表象である。我々にとってなじみが深いのは、やはり後者の意味での〈場〉であろう。「場をわきまえる」、「議論の場を設ける」というとき、〈場〉によって表されるのは、個人が置かれた状況、機会のことであり、それらは環境の中の様々な要素から包括的に知覚された事物のまとまりとしての状況を指す。しばしばこれらの〈場〉は、目的、必然的な成り行きといったある方向性を持っており、他者と共有されることが成立の前提とされる。

〈場〉そのものには形も質量もなく、従って直接的な知覚の対象とはならないが、通常我々はその中に存在することで様々な〈場〉の様態に関わる情報を感じ取ることにより、そこに〈場〉が存在していると認識することができる。この形のない〈場〉の成分が環境の中から抽出されてくる時、我々はどのような基準でそれを認知し、〈場〉の境界がどのように引かれるのか。この問いに答えることで、〈場〉を構成するものの具体的内容と、それらを包摂し全体を形作る〈場〉の概念の意味するものが浮かび上がるものと思われる。以下、〈場〉の本質に直接関わると思われるこの点を中心に、これまで論じられてきた〈場〉に関する様々な理論を見ていきたい。

2. 〈場〉の理論の歴史と概要

〈場〉および抽象的な意味での〈場所〉という言葉で表される同等の概念を扱った理論は、日本内外に多くの時代にわたって存在する。ものの存在の基体として場所的なものを想定する存在論は、古くはギリシャ哲学に見られる。露木（2003）によれば、ギリシャ哲学においても、〈場所〉論は学問上の中心的なテーマの一つであり、「空間、時間、身体といった人間の実存に関わる概念と関連づけられ展開されてきた」（p.14）。

古代ギリシャの存在論、修辞学において確たる地位を持っていた〈場所〉中心の考え方は、西欧世界においてはルネサンス以降は次第に知の前面から姿を消していく。これに取って代わるのがデカルト的〈方法〉を世界認識の中心に据える流れである。中村（1989）によれば、デカルトは、ギリシャ哲学の流れを汲む「トポス」、「トピカ」といった場所的概念と事象の内容を結びつけて行う伝統的な認識論、修辞法を真っ向から否定し、論理の鎖を辿って物事をその原因へと還元していく〈方法〉を提唱した。こうして、近代科学の機械論的思考の基礎としての因果律に基づく方法論が、存在論、認識論を席卷することとなる。それは、人々に「その生存あるいは存在の基盤の喪失」（p.47）をもたらす転換であった。

19世紀に入り、自然科学の分野で場所的認識論の復権が起きる。そのうちもっともドラスティックな出来事の一つが、ファラデー（Faraday, M.）、マクスウェル（Maxwell, J.）らの電磁場の研究による、物質を中心とした空間観と力学からの転換である。ニュートンの「絶対空間」が示すとおり、それ以前、空間とは外部のいかなるものとも関係なく、常に同一かつ不動なものであるとするのが物理空間のとらえ方の常識であり、このことが、運動の第一法則などの、物体そのものの質量と物体間の線的な力学的関係のみを物理法則の本質と見るパラダイムの論理的根拠となっていた。⁽¹⁾

こうした空虚で不動なものと考えられていた絶対空間の概念は、マッハ（Mach, E.）の遠心力の研究に伴う空間の相対化などの議論を経て揺らぎ始め、ファラデー、マクスウェルらによる電磁場（electromagnetic field）の近接的作用とそれが生じる力線の発見により、従来考えられていたような、引力などの遠隔作用の理論によってはそのメカニズムが説明できない、電磁場という非物質的な作用の存在が明らかになる。認識論的視点から見た彼らの業績は、電磁気現象を「電気や磁気を帯びた物体が引き起こす周囲の空間の状態変化」（中村 1989, p.59）と捉え直すことによって、電磁場がエネルギーそのものであることを示し、物理現象の本質は電荷、粒子といった質量を持った物体とその間の線的關係のみにあるのではなく、物体を含む空間である〈場〉にこそ物理現象の本質が関わっているという事実を実証的に詳らかにした点にあったといえる。⁽²⁾

20世紀に起きた〈場〉の理論にとっての最大の事件は場の量子論（quantum field theory）の出現であった。なかでもハイゼンベルク（Heisenberg, W.）とパウリ（Pauli, W.）が1920年代から30年代にかけて発表した論文により、光子と同様、物質粒子も〈場の量子〉として理解しうることが明らかとなったことは、物質中心から〈場〉中心の存在論へのパラダイム転換を迫るものであった。即ち、それまで質量を持ち、引力的に作用する力によって結びつけられていると考えられていた素粒子は、実は粒子であると同時に波という性質をもち、他の粒子とともに〈場〉を構成するのではなく、〈場〉の作用そのものとして存在しうることが明確になったのである。中村（1989）によれば、これが意味するものは、宇宙にあるのは電磁場、電子場、量子場といった〈場〉の集合体であり、粒子は二次的な事象になったということであった。中村はパージェル（Pergels, H.）の言を引き、次のように記している。

本質的な実在とは、特殊相対論と量子力学との法則に従う場の組に他ならず、それ以外のことはすべて、これらの場の量子力学的な動力学から導かれるのである。[中略]ここにミクロの世界、いや世界の全体は相互作用する場の広大な活動舞台と見なしうるのである。（中村1989, p.77）

物質的実在原理が場の量子の変換性とその組織に帰着されとした場の量子論により、いわゆる「真空」といった空虚と思われていた空間は、エネルギーと可能性に満ちた、ものの存在の基盤であるとの知見は広く認められ、自然科学以外の分野に様々な影響と示唆を与えることとなる。即ち、現代物理学の発見により、物体は単独に存在するのではなく、周囲と不可分に結びつくとともに、個々の物体の性質は周囲との相互作用という意味でのみ理解しうる（西口 2000）という認識が、哲学、生命科学、複雑系工学などのシステム理論、組織論をはじめとする社会科学などにおいても存在論上の新たな基本原理、および強力なメタファーを提供することとなったのである。

3. 哲学における〈場〉

3-1 古代ギリシャ哲学の〈場〉

前節で論じたように、哲学における〈場〉(場所)の概念はギリシャ哲学において存在論を論じる上での重要な位置を占めていた。中村(1989)によれば、〈場所〉をものの存在に不可欠な基盤と捉える考え方は、「空虚」、「ケノン」といった概念を扱う古代ギリシャの「原子論者」達の言説の中にすでに存在していた。その後〈場所〉に関する存在論が体系的な形となって示されたのが、プラトン(Plato)の「コーラー」(khora)を中心概念の一つに置く宇宙論であった。中村によれば、プラトンの宇宙論は、三つの原理、即ち、(1)造形者の神デミウルゴス、(2)存在者の原型としてのイデア、(3)存在者の質料あるいは〈場〉としてのコーラーにより成り立っていた。コーラーとは、形を持たず、従って感覚では捉えられない無限定な空間である。規定原理としてのイデアと相対する無限定な原理を象徴するコーラーは、デミウルゴスの秩序づける力によって結びつけられることによって宇宙の生成をもたらす。それは、「あらゆる生成の受容者」であり、「あらゆる形を受け容れることのできる可塑的な材料である」(p.24)。つまり、コーラーとは一言で言えば、事物に形を与える母胎であり、それは「決して滅亡することなく、すべての生成するものにその位置を提供」(p.24)し、存在の〈場〉を与えるものであった。

宇宙に空虚はないと考えたプラトンが、コーラーという、形はないが質的である概念を用いることでその説明を試みたのに対し、アリストテレス(Aristotles)は、これを「質量と〈場〉とを同一視したもの」として批判した(中村1989, p.25)。〈場〉に対するアリストテレスの考え方はその「場所(トポス)論」に示される。彼は〈場所〉を、「包み込んでいるものと包み込まれているものとがそこにおいて接触しているところの、包み込んでいる物体の境界」と定義し(露木2003, p.30)、〈場所〉を物体とは別の、物体に対してある力を及ぼす実在であると考え、存在者が存在するにはまず〈場所〉がなければならないとした。トポス(場所)は元素間の運動を引き起こす媒体であり、その意味で空間を満たすのは空虚(真空)ではなく、力の〈場〉としての〈場所〉であるとされた(中村1989)。中村はこのトポスを、生きた動的な自然観を説いたものとして、象徴論的にだけでなく生態学的にも積極的な意味を持つものと評価している。

量子論、西田哲学を待たずして、古代ギリシャで存在や思考の基本原理として〈場所〉(場)が論じられていたことは、〈場〉の存在論の視点から考えると注目に値する。一方、論理の鎖を辿って物事をその原因へと還元していくデカルト的「方法」の隆盛により、近代の思考はその基盤としての〈場所〉を前提とはしなくなった。デカルト的〈方法〉は、個人を伝統や共同体から独立した存在と見ようとする時代の要求に乗り、近代科学世界を中心に原理化して支配を強めていくが、中村(2000)によれば、人々は思考や記憶の基盤としての〈場所〉を失うことによって、その「生存あるいは存在の基盤そのものの喪失を痛切に感じるようになった」(p.47)。

3-2 西田幾多郎の〈場所〉

哲学における〈場〉を論じる上で、西田幾多郎の〈場所〉論は避けて通れない。しかしその独自の術語で埋め尽くされた文体は一見錯綜を極め、論旨は互いに関連するテーマをめぐって行きつ戻りつしながら展開するため、その理論の核たる部分をつかむのは難儀である。それは小坂（2002）によれば、西田の記述が完成した論理を提示するのではなく、「形成途上の未完成なものを十分整理しないまま読者に提示している」（p.150）からである。ここにも、彼の述語論理的思索が垣間見えるようだが、思想としての西田の場所論理はヨーロッパの主語論理、対象論理の批判と突破を目指すもの（角田 2001）であり、それ故従来の西洋的思惟方法をその根底から一変するもの（小坂 2002）であった。

上田（1998）によれば、西田の哲学には〈純粹経験〉にはじまり、〈自覚〉を経て〈場所〉に至るというはっきりとした流れがあり、それは立場が変化したと言うより、すべての過程を経て初めて意味をなす大きな連関の総合であった。この意味で、これら三つの概念は切り離して論ずることはできないが、本稿においては、彼の場所論理の思想史上の意義にのみ絞って論を進めたい。

西田の場所とは、よく知られるとおり、ものがそこに〈於いて有る〉存在のことである。彼は、同時代の認識論に通説化していた個々の対象とそれらの間の関係としての作用にのみものの存在の成立要因をみる立場を離れ、対象、そして対象間の関係をも包むことでその存在を成立させるようなある実在を想定し、これを〈場所〉と名付けた。論文「場所」の冒頭から西田はこの立場を明確にする。

対象と対象が互いに相関係し、一体系を成して、自己自身を維持すると言うには、かかる体系自身を維持するものが考えられなければならぬと共に、かかる体系をその中に成立せしめ、かかる体系がそれに於いてあるというべきものが考えられねばならぬ。（西田 1927, p.88）

上田（1998）の述べるように、西田の場所の具体的な形は、まず〈意識〉の見方と結びついて提示される。西田は、〈意識〉という作用の統一者としての〈我〉とは別に、〈意識〉の作用が成立するには〈我〉と〈非我〉との対立をうちに含み、いわゆる意識現象を内に成立せしめるものとしての〈場所〉がなくてはならぬものとした。意識の内容を成立させるこの〈場所〉を西田は「意識の野」と呼ぶが、これを意識する側から見れば、対象を「映す場所」となり、対象の側から見れば、それが「於いてある場所」となる。ただし、あらゆる意識作用を包むこの意識の野も、一つ概念として〈自覚〉される以上、それを包む〈場所〉に於いてあるものと考えられる。こうして無限に拡大する極限の〈場所〉として、自らは無にして、しかも一切のものを自己自身の影として自己の内に映す真の〈無の場所〉が必要となる。これを西田は「絶対無の場所」と呼び、「真に主語となって述語となることなき」（p.110）唯一のものと説明した。

西田の場所はその〈無〉の性質によっていくつかの段階に分かれるが、〈有〉を生む〈無〉という点で共通する。ここでいう〈無〉という考え方は、決して空虚であることと同義ではない。角田（2001）は玉城の「絶対無はニヒリズムではなく無限の生命を汲み取っていく泉である。」との言を引いた上で、「この場所こそ私の自由への根源であり、場所から限定なき限定を受けて私は自由となっている。」（p.118）と述べている。つまり西田の〈場所〉とは、形相や質料こそないが、自らを限定することにより、〈個〉においてその自己表出をなし得る〈無〉であり、物の生成原理そのものである。それは、中村（1989）によれば、「無でありながら無限の有を含むもの」（p.173）であり、「〈有〉の欠如としてではなく、積極的に〈有〉を生み出す豊かな世界」（p.181）たるものである。佐伯（1999）が指摘するように、〈場所〉の自己限定としてのものの存在、〈無〉である場所が〈有〉を生み出す、といった論理は現代物理学の知見にも通底する。佐伯は、すべての物がその抽象であるボーム（Bohm, D.）の「全体運動」（whole movement）を〈場所〉になぞらえ、自らはある意味に限定されない、その自己限定が〈物〉の存在規定となるものとして〈場所〉を説明している。上田（1998）によれば、事物、意識の存在の根源的原理としての〈場所〉という考え方は、「西田の哲学の独自にして永続的な意義をなすもの」（p.26）であるが、それはまた、東洋、西洋という対立を超えて、「いっそう深い根底を見出すことによって相補って人間文化を形成」（p.14）するための端緒をつかもうという試みでもあったといえる。

以上から明らかなように、西田の〈場所〉は直接知覚の対象となるような空間や比喩的空間を指すものではない。むしろそれは、ものの存在や運動、物の間の作用や関係を、それらを包み込むことで成り立たせる原理というべきものである。この点に於いて、それは〈場〉と呼ぶ性質を持つ概念であるといえる。

4. 現代における〈場〉の諸理論

4-1 社会科学のアプローチ

4-1-1 レヴィンの〈場〉

社会科学の分野において、〈場〉（field）の視点から人間の行動を説明しようとしたのが、社会心理学の父と言われるレヴィン（Lewin, K.）であった。彼は〈場〉を、「一般に相互に依存していると考えられる共存する事実の全体」と定義した（西口 2000, p.65）が、それは個人にとってはその人と、その人にとって現存する心理学的環境とからなる「生活空間（life space）」に他ならない。彼は、「心理学的な場における何らかの行動または何らかの他の変化は、その時における心理学的場にもみ依存する」（Lewin, 1951, p.58）とし、心理学的環境は、機能的には一つの相互依存的な〈場〉たる生活空間の一部と見なされるべきだと考えた。ここに、彼の、 $B = F(P, E) = F(LSp)$ 、即ち、行動 = 人と環境の関数 = 生活空間の関数（p.140）という「法則」が打ち出される。彼によれば、個体の生活空間の特性は、一部は個体の歴史の産物としての個体の状態に、他方では非心理学的（物理的乃至社会的）環境に依存する。これらを彼は「場

の境界条件」と呼んだ。レヴィンにとって、心理学を含む科学において重要なのは現象から概念へと適切な翻訳をすることであり、そのために彼の言う（例えば集団圧力のような）〈構成概念〉の定義を精緻なものにし、生活空間におけるその構成要素間の力学的関係を明らかにする必要がある。そのために彼は数学的概念を用い、自らホドロジー心理学と呼ぶ、〈場〉に基づく方法論を展開した。

レヴィンが〈場〉の概念を重視したのは、一つには当時の心理学が心理的要素の顕型的（phenotypical）特性とその類型化にのみ傾注し、要素間の相互依存関係による力学的特性を見落としていた点を指摘することが目的であった。例えば、怒り、緊張といった情緒の状態が、同一人格においても環境により攻撃性を帯びたり帯びなかったりする事実は、単に刺激－反応の枠組みによる観察では説明がつかない。彼は、社会心理学においては、「文化的、歴史的、社会的、心理的、並びに物理的事実を共通の地盤に基づいて取り扱いうる科学的言語（概念）を発達させることが重要である」（p.133）と考え、場の理論によってのみそれが可能になるとした。彼にとって、〈場〉こそ人間の内外に存在する様々な力学的要因を結びつけ、その分化の度合いによって人格の発達をも説明しうる⁽³⁾ 究極の〈構成概念〉だったのである。

こうして、力学的〈構成概念〉による社会心理学的な事実の表現のために〈場〉の概念を用い、グループダイナミクスやリーダーシップといった今日も意義のある多数の概念の創出により、〈場〉という概念の学問上の地位を高めたレヴィンであったが、加藤（1971）は、レヴィンの〈場〉の理論においては、知覚現象は個人の「外側」の〈場〉に置かれており、その内的な構造の問題は「目標の優位性」といった現象学的概念に帰着させていると述べ、その知覚理論への貢献の限界に触れている。即ち、加藤によればレヴィンにおいては知覚の生理学的身体的基盤は詳細に考察されないため、その実際の成立課程は説明されていない（p.14）。このように、個人がどのようなメカニズムによって〈場〉に関する要因を知覚するかについては、踏み込んだ議論がなされていない点で、レヴィンの理論は、〈場〉の理論そのものの発展への貢献においては限界を持っていた。

4-1-2 組織経営論における〈場〉

〈場〉の理論の実践的な側面は、組織研究において応用され、組織マネジメント、知識創造のための原理として〈場〉の概念が取り上げられている。その初期のケースとして、米国ニュージャージーベルの社長であったバーナード（Barnard, C.）が経営者の立場から、組織を重力場や電磁場にたとえて「人力の場（field of personal forces）」と見なした上で、組織の力は人間の相互作用が生み出すエネルギーに由来するとした（露木 2003）。この他、組織の活力、創造力の源泉をその構成要員の間の相互作用に求める理論は、上述のLewinのグループダイナミクス理論の応用という形で主に米国で発展し、近年になって、例えばWeisbord（1987）やBurke（1994）などの組織論で中心的テーマとして論じられている。

日本においては、1990年代になって野中ら（1995, 1999, 2000）を中心とする、組織におけ

る知識創造に焦点を当てた〈場〉の理論が経営学の分野で注目されるようになる。野中らは、組織において知識の生成を伴う諸活動のすべてを組織的知識創造プロセスと捉え、この知識創造プロセスこそ企業の本質であるとした。野中・紺野（2000）は、創造する力は単に個人のうちにあるのではなく、個人間の関係、および個人と環境との関係にあるとし、この関係を〈場〉と捉えた。彼らによれば、個々人が関係としての〈場〉に一体化することでそれぞれのうちにある知識が共有され、新たな知識が創造される。ここでいう知識とは、日々の行動や実践を通じて「真」であるように高められていくものであり、「正当化された真なる信念」（野中・紺野 1999, p.102）とも言うべきものである。具体的には、知識は「形式知」と「暗黙知」、およびそれらの相互作用から成り立っており、形式知が言語化され、客観的に明示された知識である一方、暗黙知とは非言語チャンネルを通じて得られる言語化しにくい知識を指す。〈場〉が共有されるのは主にこの暗黙知の働きによるが、それは身体感覚や心的経験を通じて得られ、感覚や情緒と結びついた、技術習得や状況の直感的認識に不可欠な知識である。この暗黙知が共有されることが個人間に共通の〈場〉が成立し、組織的知識創造が起きる第一条件となるが、暗黙知と形式知は本来分離したものではなく、両者は〈場〉の働きによって知識創造の文脈の中に位置づけられ、単なる意味情報と区別される。知識創造が起きるためには、〈場〉において暗黙知を共有した上で、主客非分離的にしか認識されない暗黙知を意味的分節を経て客観的な形式知に変換する必要がある。野中・紺野（1999）によれば、これには4つのプロセス、即ち、暗黙知を共有する「共同化」、共有された暗黙知を言語や図像といった形式知で表す「表出化」、表出された形式知を他の形式知と結びつける「結合化」、そして統合された形式知を経験的知識として再び身体化する「内面化」、から成っている。このように、創造的な知識とは特定な文脈の中で暗在的チャンネルを通じて他者と共有され、修正されることによって構築されるが、野中らという〈場〉とはこの共有された〈文脈〉そのものに他ならない。野中らは、この〈場〉に基づく知識創造理論を実際の経営手法として使い、例えば企業スタッフが顧客との直接的（face to face）コミュニケーションをはかることで「顧客との切れ目ない共体験」（野中・紺野 2000, p.50）を通じ、その世界に「棲み込む」ことで、新たな製品開発や市場開拓といった知識の創造を行うという実践に関わっている。

伊丹（2000, 2005）は、それまでの組織経営においては、管理システムなどの組織構造のみに重点が置かれ、実際の手法と意志決定、およびスタッフの心的エネルギーを結ぶためのプロセスについての理解が欠落していたと指摘した。その上で、このプロセスを形成する〈情動的相互作用〉の容れ物としての〈場〉を中心的な原理として置く〈場のマネジメント〉が求められていると主張した。〈情動的相互作用〉とは、組織内において人が言語、非言語チャンネルを通して、情報を受け取り、処理し、意味を発見し、新たな情報の創造を行うプロセスをさすが、通常これに付随して心理的相互作用が起きる。これらの作用が単発的でなく、継続して自己組織的に起きるためにはある仕掛けが必要であると伊丹は考えた。〈場〉とは、この組織における〈情動的相互作用〉が継続的に生まれるような「状況的枠組み」（伊丹 2000, p.17）のことであ

る。では、〈場〉によって具体的にもたらされるものは何か。伊丹（2005）によれば、〈場〉において濃密な〈情動的相互作用〉が行われることで、自然発生的（自己組織的）に、人々間の共通理解が生まれ、個人の情報蓄積が進み、相互の〈心理的共振〉により、成員の心理的エネルギーが高まる、という三つの効果が得られる。実際の〈場のマネジメント〉においてこうした作用を生み出すためには、マネージャは組織のメンバー間に自然に〈場〉が生まれるよう〈場のインフラ整備〉をする必要がある。具体的にはメンバーが一体感をもてるよう、仕事内容の共通理解としてのアジェンダの明確化、情報交換がしやすいマイクロ・マクログループや物理的空間の設定、挑戦的目標設定によるゆらぎの創出、綿密な情報共有などがそれである。こうした〈情動的相互作用〉を中心に置く経営手法の例として伊丹（2005）は、職場内の物理的仕切りを取り去ることでface to faceのコミュニケーションを図ったソニーのVTR開発チームや、スタッフが自発的に参加する会議を設定することにより相互理解とアイデアの創出を図ったキャノンやアサヒビールのケースを挙げている。伊丹（2000）は、技術と組織の移動が激しく、偏在的なマシノベーションが起きる現代にあつては、個人単位ではなく、グループの渦の中から変革が生まれることを前提とする経営が必要であり、それには、個人をシステムとリーダーにより管理する伝統的な上意下達式の「ヒエラルキー・パラダイム」から〈情報相互作用〉を〈場〉によってマネージする「場のパラダイム」への転換が必要であると結論づけた。

露木（2003）によれば、組織経営理論における〈場〉を中心に置く考え方は、要素還元主義でも全体主義でもない、関係主義とでも言うべき新しい論理を同分野に提示するものであった。にもかかわらず、組織論においてなかなか〈場〉の概念が定着しなかったのは、その概念体系と（測定法などの）操作化が応用可能な域に達していないからである。この意味で、扱われる概念に関し、一般化が可能な現象として客観性を求める現代社会科学においては、〈場〉という概念を組織の統合原理として積極的に位置づけられない状態にある。しかしながら、昨今の極端な成果主義への反省と日本型組織経営の再評価の風潮は、組織経営における、個と個、および全体と個のつながりを重視する〈場〉的パラダイムへの回帰を示唆するものであるといえる。

4-2 生命科学的アプローチ

生命要素と〈場〉との関係を生命関係学（bioholonics）の視点から説明したのが清水 博である。清水がその〈場〉の理論に立ち至ったのは、生命学者として、生命とは何かを実証的考察を通して徹底的に考え抜いた結果のことだった。清水（1978）は、生命の働きをその構成要素間の個別的な因果関係の総体と捉える立場を離れ、生命要素が共有するグローバルな性質を、全体として〈生きている〉ことの根拠として見る。グローバルとは、物質を例にとれば、例えばいくつかの種類の金属はある条件を満たすことで強磁性を帯びるが、一定の温度まで熱すると突然磁石の性質を失う。これは分子レベルの変化とは関係なく起きる現象である。このことから、強磁性という性質は分子レベルの分析では説明できない、いわばグローバルな性質

であるという。〈生きている〉とはどういうことかという問いへの答えは、自然科学的には明確には与えられていないが、生きている状態とは、「生体という分子の集まりが持っているグローバルな性質」(p.34)を指すと清水は指摘する。これは具体的には、生命体が持っているその構成要素間および他者との間に調和的な関係を生み出し維持していくという、秩序の自己組織として表現される。

清水は、生命要素には他の生命要素との関係を自己組織的に生成し、動的な秩序を生み出していく能力があると考えた。例えば、清水(1978)は、彼の考案した流動セルと呼ばれる実験装置の中で、分解した複数の筋肉分子(ミオシン)が、ATP分解反応を通してその溶液に方向性の定まったマクロな流動を起こすことを確認し、これを生体の構成要素が一定の条件下で協同的に一方向への自立的な運動を生み出すことを示す現象として提示している。では、この動的秩序の協同生成を可能にしているものは何か、清水はそれを生命体が自ら〈情報〉をつくり出す力であると結論する。清水は生体の形態形成を、「細胞の集まりが、秩序の高いマクロな空間的パターンをつくるように分化していく現象」(p.221)と定義したうえで、本来様々な分化の可能性を持つ細胞がある基本的な秩序を与えられて集まったときに、そのパターンが〈位置の情報〉を各要素に与え、これにより分化は協同の度合いを増すとした。この協同化は位置情報をさらに精緻にするため、パターンの秩序もさらに高まる。ただし、これを説明するには、ボトムアップ的に構成要素個々の性質を足し算していく考え方は異なる、グローバルな系を想定することが必要になる。この系においては構成要素はある種のトップダウン型の論理によって相互の関係を構成していると考えられる。この、生命要素による互いにコヒーレントな自己表現を可能にしているのが〈場〉の情報である。〈場〉の情報を得て環境の変化と互いの関係に応じた自己表出をしながら、ネットワーク全体としての自己表現を自律的に創出していくこの生命要素を、清水は「関係子」と呼ぶ。関係子により自己組織されたシステムが〈場所〉であるが、〈場〉とはその「場所に出現する秩序パラメータ」(清水 1999, p.52)であるとともに、一種の拘束条件である。即ち、関係子の自己表現の無限の可能性を、全体の表現と合うように一つに絞って行くには何らかの限定要因(拘束条件)が必要になるが、関係子の集団は〈場〉を作り出すことによって、〈場所〉全体としての表現が自己の表現と整合的になるよう自らの振る舞いを限定していく。

この拘束条件としての〈場〉とは、具体的にどんなものなのか。ミクロのレベルで見れば、それは正常細胞同士が生成と消滅を繰り返しながらひとつの器官を構成しその機能を維持するという協同プロセスにおいて、個々が勝手に増殖、暴走することなく全体としての秩序を維持し得ている事実を考えてみればよい。そこには、特定の上位器官からの命令によらない、自らが協同的に創り出した方向性が共有され、全体の調和を乱すような個の振る舞いはこれによって抑制されている。(この例外が、がん細胞である。)また、人間社会のレベルで考えるならば、例えば安定した自由経済下の市場においては、ものの価格は供給する業者らがそれぞれ市場全体の動向を察知することにより適正なものに調整され、流行についてはユーザーと社会は製品

に対する意味解釈をめぐる互いに影響し合いながら整合性がとれる落としどころを見出していく。また、サッカーやラグビーなどの個々のプレーヤーの動きの自由度の高いスポーツでは、ゲーム全体の流れから自己に期待される動きを割り出し、ゴールという共通の目的に向けてその動きを自ら調整していく。こうしたことが可能になるのは、構成要素が全体の持つ方向性に自己の位置を照らし合わせ、自ら全体の動向や目的に合致する形でその役割を定義していくからである。ここにおいて、個としての自己表現は全体との整合性を持たせるべく限定され、〈場所〉の意味生成に貢献する。つまり、端的に言えば、拘束条件としての〈場〉はあるシステム（場所）の中に存在する、「関係子のはたらきをまとめる」（清水 1999, p.19）ものである。因みに、個々の要素がこうした拘束条件を生みだし、それを自らに課すのは、とりもなおさずそのことが個としての自らの生存にも必要だからである。つまり、〈場〉が必要なのは、「個が安定して生きていくためには、共同体の身体に生まれる〈場〉に包摂されていなければならない」（清水 2000, p.88）からである。

関係子が〈場〉を共有し、全体としての自己表現を創出するプロセスを、清水はその〈即興劇〉モデルを使って説明している。清水（1996）によれば、個々の役者としての〈関係子〉は観客も含めた劇場（場所）の要求に会うよう、無限定な状態から協同で即興劇を創り出すのだが、役者間の演技に整合性がとれるようにするには拘束条件としてのシナリオが必要となる。役者らがこのリアルタイムに創出される自己表現としての演技のシナリオの共有を可能にするのが〈場〉の働きである。その際、〈場所〉と個々の役者は循環的な情報交換のサイクルに置かれている。即ち、個々の役者は、自己を含んだ〈場所〉の状態をその身体を通じて自己の中に映し出し、それを元に仮説的に自己の演技を演じていく。その結果起きた〈場所〉の変化を再び感じ取りながら、自己の演技と、他者の演技や劇場（場所）の性質との整合性を高めていく。この情報の循環を清水は「ホロニックループ」と呼んだ。それは、いわば、〈場〉を介した関係子の協同による〈場所〉の意味とそれに応じた関係子個々のあるべき自己表現が繰り返し再定義される循環のプロセスである。人間を含む生命要素は、この〈場所的自己言及〉を通じて全体としてのコンテクストの共創を行うのである。

ここで、〈場〉の理論的基盤を論じたものとしてのレヴィン、西田、清水の〈場〉の概念を比較しておきたい。レヴィンの〈場〉は〈力の場〉に象徴されるように、様々な〈作用〉の総合そのものであった。一方、西田の〈場所〉とは、そうした作用そのものを成り立たせている原理であるという点で、両者のとらえ方には大きな隔りがある。上述の通り、西田の〈場所〉は事物とその間の関係性の背後にあってこれを成り立たせている原理である。〈場所〉は対象が映し出される〈野〉であって、それ自体は意識されない。清水の言う〈場〉とは、直接知覚はできず、その働きを通して自己の中に〈場〉の情報として映し出すことによるのみ自覚するものとした点で、西田のいう〈場所〉の概念にきわめて近いものといえる。

清水は西田幾多郎の影響を自認しながらも、その理論が生命体の活動を具に見つめることから導かれた知見に基づく独自のものであったことを強調している。それは、徹底した科学者と

しての立場から、生命とそれを取り巻く環境がおかれている状況に対する彼の問題意識に出自し構築されたものであった。この意味で清水にとって〈場〉とは決して比喩的に用いられる概念ではない。彼は、人間も社会の中で〈関係子〉として存在する以上、自他非分離的自己（場所的自己）である〈場〉を共有しながら他者との共創をなすべく方向付けられた存在であると考えている。ここに彼のいう、明在的存在（自他分離的自己）と暗在的存在（自他非分離的自己）という生命の二重性に基づく縁起的創出のための〈場所〉としての共同体の考え方が現れる。彼は言う。

共同体が持続的に発展するためには、明在的および暗在的世界という二重世界の構造を持たなければならない。[中略] もしこの考えが原則的に正しいのであれば、実際の社会においてもこの二重世界的構造が見られなければならない。（清水 2000, p.165）

彼の生命存在の二重性の考え方はさらに進化論のパラダイム転換の必要性への言及に及ぶ。清水（2000）によれば、ダーウィンの進化論に欠落していたのは、生命の場所的進化に関する考察であった。それは自然を「一細胞的観点」から明在的存在としてのみ捉え、暗在的な働き、即ち〈場〉の視点を欠いているとする。現実存在する生物的多様性とそれに基づく調和的共存を説明するには、「大きな生命的共同体の歴史的進化」（p.175）という見方がなければならないと彼は指摘する。

生命の意味の探求を通し、一つの壮大な場所的パラダイムを確立した点で、清水は〈場〉理論の第一人者と呼びうる存在である。その立場は、「人間もその一員に加えられた生きている自然の全体像」（清水 1978, p.23）をつかもうとするものであり、世界全体こそが一つの〈場〉であって、この全体の調和を保っていくことなしで人間の生存はあり得ないという強力な信念に基づくものであった。その理論は以後の生命科学、機械工学、情報通信技術開発、組織経営論などに影響をあたえ、応用の幅を広げている。

5. 日本人論と〈場〉

5-1 中根千枝の〈場〉

日本人の生活に伝統的に根づく〈場〉の感覚は、日本論の論者によってどのように説明されてきたのだろうか。

〈場〉の概念を用いて日本人論を展開した社会人類学者としてもっともよく知られているのが、中根千枝である。アジア諸国を中心とする文化比較研究から、中根は日本社会における個人の集団への帰属形態が独特の性格を持つものであることに着目し、これを〈場〉の概念を用いて説明した。中根（1967）は、日本人の社会への参加様態は、氏・素性、家、老若、学歴、地位、職業といった個人の資質である〈資格〉の共通性によるというよりも、他者と共有される〈場〉に置かれていることに特徴付けられるとし、個人の居住する地域、所属機関などを典

型的な〈場〉として挙げている。中根によれば、〈資格〉に基づく集団参加が優勢である社会では、個人もその資格に応じて複数の集団参加が可能なのに対し、〈場〉に基づく社会参加を基本とする日本社会では、自己の所属する〈場〉は「自己の社会的存在のすべて」(p.31)とも言えるものであり、〈場〉からの離脱は社会生活上の基盤の喪失を意味するため、個人は〈場〉への帰属を余儀なくされる。

個人的業績や契約による自他の評価よりも、集団や組織への所属の事実そのものに個人の全人的コミットメントと帰属感の源泉を見る日本人の集団帰属形態は、河合(1976)や三戸(1994)の「家」、フクヤマ(1996)の「イエモト」といった概念についての記述の中でも同様に指摘されている。

中根の〈場〉とは(多くの場合偶然によってあてがわれた)所属集団そのものであり、それらへのメンバーシップが直接個人の生活様態を左右する、社会的な枠に他ならない。従って、西田の、存在に根拠を与える原理としての〈場所〉や、清水の、構成要素をまとめあげるものとしての〈場〉とは異なっているが、個人の存在を社会的に意味づける仕掛けとして論じられている点で、次に述べる河合の〈場〉と多くの共通点を持っていると言える。

5-2 河合隼雄の〈場〉

ユング心理学者の河合隼雄は、日本人間の人間関係の特質を説明するものとして、個人間を結ぶ関係全体としての〈場〉をとりあげ、その日本人論を展開している。河合(1976)によれば、日本人にとって〈場〉は言語化されない、感情的な一体感として、特定の状況や集団内の個人間に共有される。〈場〉はウチとソトの意識の源泉であり、〈場〉の内にいる者同士を結びつけているのは、無意識的に働く母性原理⁽⁴⁾のもつ包含作用である。河合は〈場〉のこうした峻別機能を次のように説明する。

場の内外の対比は余りにも判然としており、そこに敵対感情が働くと絶対的な対立となり、少しの妥協も悪と見なされる。ところが、場の内においては、妥協以前の一体感が成立しており、言語化しがたい感情的統合によって、すべてのことがあいまいに一様になってくる。(河合1976, p.14)

河合によれば、〈場〉の中にいる者はすべて母性原理のもと絶対的平等関係にあるとみなされ、これによる感情的な一体感を重視する日本人は、いったん形成された〈場〉をできる限り維持しようとする。日本社会のタテ関係は、あくまで〈場〉における成員間の平等を前提に、〈場〉の均衡の維持の原則から生じたものである。

河合(1976)は日本人の倫理規範のありかたを〈場の倫理〉として、西洋社会における〈個の倫理〉と対照して記述している。河合によれば、〈場〉による一体感を人間関係の基本におく日本人は、個の論理よりも全体としての〈場〉の論理を優先させ、その善悪の基準の判断の拠

り所は、個人の内にいる絶対的な倫理観よりも、その行為が〈場〉の均衡を乱すか否かの識別にある。例えば、事故の加害者と被害者の間でも、一旦、加害者が非を認め関係性が結ばれることで〈場〉が成立すると、被害者側は〈場〉の均衡を破るような法外な賠償金は請求できなくなる。個人を行動の動機を生み出す主体とする文化ではまず納得のいかないであろうこうした論理が成立するのは、〈場〉においては責任が全体にかかってくるため、被害者もその一端を担うことが必要になるからである。また、加害者側が言い逃れをしようとすると〈場〉から外れたものと判断され、徹底的に責任を追及されることになる。このように、日本社会では「場に属するか否かがすべてについて決定的な要因となる」(p.14)。

河合(1978)は、日本的〈羞恥〉の感情を、この〈場の倫理〉と連動した情動反応として説明する。河合によれば、日本人が〈場〉の論理に従って生活する中で、自分の欲望を満足させつつ、なおそれが〈場の倫理〉に抵触していないかどうかを計る最も適切なゲージが〈羞恥〉の感情である。即ち、ある個人の行動が利己的振る舞いや偶発的な要因で〈場〉の境界条件に抵触し〈場〉の均衡が破られそうになると、〈羞恥〉が働いて内側から個人に警告する。これは反省的判断によらず、瞬時になされる情動的な反応である点でルース・ベネディクト(Benedict, R.)のいう公恥としての恥の感覚とは全く異なったものであると河合は指摘する。河合によれば、〈羞恥〉の感情に基づく自己規制の方法を子供のころから学習させられる日本社会では、そのメカニズムは日本人の生活習慣の中に組み込まれ、〈羞恥〉は、個人間の利害や距離感の調整を取り持つ〈間〉の感覚と共に、〈場〉にもとづく人間関係の生成と維持に不可欠なものである。

日本人の集団内での行動規範を司るエージェントとしての〈場〉の感覚については、例えば佐藤(2004)のいう〈世間〉の拘束力といった概念のなかにも類似した理解を見ることができると。佐藤によれば、本人も気づかぬうちにその行動を決定している〈世間〉の目がしばしば個人の主体的判断に優先する日本では、「自己責任」、さらには「人権」さえも幻想である。〈世間〉は「関係の網の目の中で『なるべくして』自分のことが決められてゆく」(p.23)プロセスの背後にある構造的強制力の源泉であり、佐藤が引用するように、柄谷のいう「自然に成る」という、日本人の思考に広く浸潤した『『自然-生成』の論理が働く場」(p.30)である。菅原(2005)が指摘するとおり、こうした日本型ピア・プレッシャーは、世代を問わず、現代もなお我々の行動と対人関係のありかたに大きく影響している。

このように、河合の〈場〉は限りなく〈関係〉そのものに近い概念であるが、個人を無意識のうちに結び、集団による個人への強制力や物理的、精神的なサポートをもたらす心理的力学上の一要因として用いられている点で、レヴィンの〈場〉(field)における心理的構成概念の一つとして理解することもできる。ただし、河合の場合、〈場〉とはあくまで関係性のシステムを指すものであり、それ自体が独立した拘束力を持ち、個人の心理に直接影響する実体である。これは伝統的に日本人の〈場〉の感覚となってその実生活に多大な影響を及ぼし、経験的にその存在が炙り出されてきた概念である。河合自身も臨床心理に携わる立場から、日本人の自己

のあり方を特徴づけるものとして、〈場〉というものをどうしても考えざるを得なかったのである。この意味で、河合にとっての〈場〉とは、経験的実感を伴った、日本人の心性を論じる上での要となるものであった。それは良くも悪しくも日本人の実生活に根付いた否定しがたい人間関係上のエッセンスであり、〈生活空間〉といった、想定された心理学上の概念を説明するために学問上鑄造された〈場〉とは出自を異にするものであった。

5-3 井出祥子の〈場〉

井出祥子は、比較語用論の立場から、談話分析を通して日本語の語用の特殊性を〈場〉の概念を導入し説明している。井出(2006)によれば、英語のモダリティ(話し手の判断や心的態度)が、may, should, mustといった助動詞で表されるような蓋然性、可能性を表す〈認識のモダリティ〉(epistemic modality)や、義務や許可に関わる〈義務のモダリティ〉(deontic modality)を中心とする個人の判断に関わるものが多いのに対し、日本語のモダリティは相手との関係や場面を表すことに重点が置かれる。これは、相手や状況に応じて使い分けられる人称代名詞、敬語、終助詞を伴う文末表現などに代表され、日本語ではこれらが一つの文の中で複合的に重なり合って使われる。〈言うという行為(speech act)〉において日本語のモダリティを見た場合、話し手、聞き手、第三者、話の行われる場面、トピック等のコンテクストに関わる要素を総合的に考慮するようなモダリティ表現を選択して〈言うという行為〉が行われるのである。同じ膠着語である韓国語にもこれほどの複雑な重層構造や授受表現は見られないと、井出は指摘する。井出によれば、こうした日本語の語用が示唆するものは、「話し手の視点がコンテクストに埋没している」(p.62)とあってよいほどの環境的要因に依存した発話形態であり、話し手は、「話の場の様々なコンテクスト情報を瞬時に総合的かつ分析的に解釈して読み取り、話し手はそのコンテクストの中で生かされていることを、モダリティ表現で示しながら話す」(p.62)のである。つまり、日本語のモダリティは、話の〈場〉における話し手の態度を表明することで、話し手を発話の〈場〉に位置づける働きをしており、これを日本人は自然と行っている。これは単純な刺激と反応による線的なプロセスではなく、様々な情報を同時に処理、統合する複雑なシステムによって可能となっていると考えられ、このメカニズムを説明するには要素還元的でないアプローチが必要であると井出は指摘している。

中村(1989)は、日本語の文がその構造上、命題としての主語が主観性を表す〈辞〉により文末に向け幾重にも包摂されていくことで、話し手のおかれた〈場面〉による拘束が大きくなる形となっていると述べている。それは相対的に主語の独立性を低め、真の主体は〈辞〉の働きの内に存すると言っていいほどに述語論理を強調した構造である。このように、日本語は場所的論理によって支配され、それは日本人の心性との連関を示唆していると中村は言う。

井出の〈場〉的視点から見た日本語の語用論は、中村の、主体を個々の主語ではなく主語自身を含む状況としての〈場〉に見る立場と呼応し、日本人の思考と世界認知が多分に〈場〉に根ざしたものであることを示唆している。

6. 〈場〉の本質とは何か

6-1 〈場〉の成立要件

これまで稿者が知る範囲で、現存する〈場〉の理論、およびそれとほぼ同義に解釈しうる概念を扱った理論を概観したが、最後にこれらを結ぶ要素から〈場〉というものの本質らしきものは何であるかを、〈場〉を語ることの意味および研究上の課題と併せて考察しておきたい。

まず、本論を進めるに当たり確認しておかねばならないのが、異なった経験的、理論的文脈で論じられた概念の間に整合性を求めること自体に無理があるという事実である。本稿では学際的考察という視点から、分野を選ばず〈場〉に関わると思われる議論を雑駁に引用したが、例えば社会科学に限定したとしても、論者により扱う〈場〉の概念は大きく異なる性格を持つ。ある文化において見られる現象はその文化のコンテクストにおいてのみ理解し得るという Geertz (1973) の指摘は、こうした学問領域を跨ぐ議論の際にも念頭に置く必要がある。一方、これまで見てきたような〈場〉の概念は、たとえ日本社会の文脈から論じられたものでなくても、我々がそれを〈場〉と呼ぶとき、ある共通の特質を観じていると考えられる。〈場〉と〈場ならざるもの〉を分ける条件とはいったい何であろうか。また、〈場〉による関係性の枠組みと〈場〉によらないものとはどこが異なるのだろうか。

自然科学に於いて、電磁場、量子場の発見が明らかにしたのは、自然界に起きる現象およびものの存在の本質が、明在的存在としての物質ではなく、その背後にある暗在的空間に働く作用の〈場〉、あるいは潜在性としての〈場〉に存し得るという事実であった。これはニュートンのなりニアな世界の構図を否定するものではないが、存在の系がそれによって定義された唯一のものではないことを二つの理論は証明したわけである。これは清水(2000)の言う生命の二重性、即ち、個を基本とした「自己中心的自己」と、〈場〉のはたらきによって自他非分離的に共有される「場所的自己」という存在の二重性の議論と同軸を成している。ここから、〈場〉とは、我々が直接知覚できる世界とは別の系である(暗在系)に属する作用に関わるものであると言って良いと思われる。この暗在系に属する作用とはいかなるものか。

〈場〉の作用の具体的性質として共通して論じられているのが、個を包摂する全体としてその中にある構成要素をまとめ、全体として何らかの方向性を生み出しているという点である。この境界は目には見えないが、〈場〉の内と外にあるもの間の区別は、構成要素間の関係性の共有によってなされている。つまり、〈場〉の中に存する個々の要素は、その〈場〉に固有な関係性のネットワークの中に取り込まれており、それぞれが独自のやり方で全体としての〈場所〉の表現に寄与しているのである。この関係性は、ある特定の上位機構の関与によらず、平等な地位におかれた構成要素の集団が自律的に生み出すものである。清水の即興劇モデルはこの関係性の自己組織のプロセスをわかりやすく表現している。この関係性の総体は、我々には河合の言う無意識的に作り出される一体感として知覚される。清水(2000)は、この生命要素による関係性の自己生成の詳しいメカニズムは未だ科学では解明されていないが、この全体としてのまとまりの生成過程を司るのは意識化されない作用である点で、それが暗在系に属するプロ

セスであると述べている。〈暗在的〉とは、即ち知覚の対象として明示できないことを指すが、露木（2003）によれば、〈場〉の情報が非線的な複雑系に属するものであることがその生成過程の暗在性の根拠となる。人間の作り出す〈場〉について言うならば、〈場〉の情報とはポラニー（Polanyi, M.）（1966）のいう「暗黙知」であり、後に触れる〈身体性〉を通じて非記号的に伝達されるものである。

さらに、ある〈場〉がそれを取り巻く環境にとって有為なものであるためには、環境の要求する方向と〈場所〉の性格が整合的である必要がある。〈場〉が本来、様々なレベルで重層的に存在するものであることは露木（2003）が指摘している。実際我々は、家庭、職場における〈場〉に属しながら、それを取り巻く地域社会、さらにはより大きな社会的枠組みが構成する〈場〉に取り込まれている。その際、比較的小さな単位の〈場〉が持つ意味を決定するのはその成員に共有される方向性であるが、これは具体的にはその集団内で共有された常識の感覚、目的意識、ビジョンといったものであると言って良い。こうした方向性は、より大きな〈場〉の持つ方向性に影響されながら、清水（2000）や三輪（2000）の述べるように、やはり言語コード以外の、身体的とも言えるレベルで個人に還元され、個人はそれに応じた役割を担いながら全体への関与の仕方を決定していく。

以上から、〈場〉の成立要件としては、（1）その内部の構成要素間に自己組織的な関係性の枠組みが存在すること、（2）この関係性を結ぶための情報が非線的かつ非記号的に伝達されていること、そして、（3）そうした関係性によって生み出された全体の方向性が個の振る舞いに方向性を与え、その振る舞いが様々な環境要因の意味を汲みながら〈場〉の意味を再構成していく、この循環的プロセスが存在すること、の3つが少なくとも必要であると考えられる。

6-2 〈場〉の機能と生成メカニズム

生き物の共有する〈場〉とは、上述の通り成員間の関係性を通じ、成員自らが生みだし、またそれによって個々の成員が位置づけられるものである。〈場〉を介在させることで個は所属する〈場所〉における自己のとるべき位置と役割を知り、それを行為としていくことで全体の調和的共存に寄与する。この意味で、〈場〉の第一義的な機能とは、個にその存在の基盤と方向性を与え、これをもとに個が〈場所〉の要求にあった行動のあり方を示すことで〈場所〉自身の存続を安定したものにし、かつ進化させていくことであると言える。清水（2000）はこうした〈場〉の働きによる全体の歴史的自己表現プロセスを「縁起的創出」と呼んでいる。これは我々人間に当てはめると、個人が協同的に全体としての共同体の表現に参画していくことを指すが、我々人間にとっての〈場〉とは組織、共同体などの集団としての活動の様々な場面で自己組織される関係性の枠組みとみてよい。人間が作り出す〈場〉に限定してみたとき、これまで見てきた理論にほぼ共通するのは、限られた状況内で言語及び非言語チャンネルを通じて情報交換がなされた結果、その集団固有の関係性のコンテキストが生じ、共有され、これを各構成員が認識してその維持に参与していることが、〈場〉が成立しているか否かの境界条件と見られ

ていることである。特に清水の場合には、〈場〉は〈場所〉と明確に区別され、〈場所〉としての共同体の成員である生命要素がそれを取りまく環境と成員の共有する方向性を個の中に映し込む作用の主体が〈場〉ととらえられるが、それは人間の場合、〈場所〉のイメージとして知覚されるといって良い。これは、〈場〉の生成のメカニズムと個人、他者、〈場所〉の関係を、科学的知見に基づいて整合的に詳らかにしたものとして、我々にとっての〈場〉というものを論じる上で有力な視座を提供する。

では、我々にとっての〈場〉の生成と更新の情報はどのようなプロセスで伝達されるのか。上述の通り、このプロセスに関わるチャンネルは科学的に特定されていないが、非記号的な〈場〉の情報が生成、共有されるうえで多分に〈身体〉的な要因が関わっていることが清水、露木、河合によって指摘されている。ここで言う〈身体〉とは、皮膚で区切られたbodyにととまらず、中村（2000）の言う拡張された〈身体〉としての近接空間、道具、また〈共通感覚〉の表現としての感情、習慣化された〈身体〉としての〈運動図式〉を含むものである。こうした広い意味での〈身体〉は、互いに共有される領域を作り出すが、それは清水（1999）によれば、個々の成員の動きのリズムや感覚が〈引き込み（entrainment）〉の作用により、互いに影響されながら全体としてのまとまった方向性に導かれるからである。こうした引き込みによる一定の方向性を持つ運動の創出は細胞レベルにも見られる（清水 1978）が、露木（2003）の論じるように、我々の場合にはこの共有された空間における情報伝達を取り持つのが、メルロポンティ（Merleau-Ponty, M.）の言う間身体性（intercorporeality）のようなものであろうと考えられる。いずれにせよ、人間の作り出す〈場〉に特有なのは、個人が〈場〉の情報を通して得た自己と全体との関係と、自己の役割の認識が、〈場〉の意味を更新するフィードフォワード的行動として、言語を含む明在的チャンネルにより表現されることであろう。中村（1989）は、〈生命場〉においてこうした「諸関係を関係づけ、構造をさらに高次化する」（p.210）行動を、高度の意味情報のシステムの駆使によるものであるという点で、人間的意識のみがなし得ることとしている。この点において、我々の意識と〈場〉との接点が生じるのであり、清水のいう生命存在の二重性が我々にとって現実味を持って理解されうると言える。

なお、〈場〉が実際の集団、組織においていかに機能し、いかに日本文化の枠を超えて個人間の関係を取り持つ原理となりうるかについては、稿を改めて論じることにしたい。

6-3 〈場〉の研究にあたっての方法と課題

本稿の最後に、研究対象としての〈場〉をめぐる方法論上の可能性と課題について論じておきたい。

〈場〉を研究の対象とする上でその存在を確認し、記述していくための条件とは何だろうか。人間が存する〈場〉が論じられるとき、その暗在性のもう一つの論拠となるのが、個々の〈場〉の詳細な性質は〈場〉の外からはわからないということである。清水（1996）の言うように、〈場〉とはそこに含まれる者が〈場〉の情報を通じて〈場所〉の状態を感じ取ることでその存在

と性質を認識できるものである。従って、原理的には、〈場〉とは自分自身がその中に入ること
で初めてその全容の描写への扉が開かれるものとの立場をとるのが妥当であると思われる。

この論理に沿えば、ある特定の〈場〉を表現するための必要十分条件として、〈場〉を成り立
たせている〈場所〉と個人、および個人と個人の間非記号的な情報伝達による相互作用とそ
れに基づく関係性の自律的生成が起きていることを、観察者自身がその〈場〉の中にプレーヤ
として入ることによってリアルタイムで描き出すことが想定される。ここに、〈場〉を研究する
に当たっての最大の困難が現出する。即ち、三宅（2000）も指摘するように、ある個人が〈場〉
における共創プロセスを表現しようとする場合、意識化されない〈場〉の全体像をどのように
自己が把握し外部の者に対し表現するかという問題である。

一方、西口（2000）も既存の〈場〉に関する理論についての学際的な考察を行っているが、
彼は、〈場〉の存在は〈場〉の諸作用の結果生ずる外的指標、つまり客観的、可視的現象の記述
によってのみ確認しようという立場をとる。確かに、外部からの観察には、〈場〉で実際に起き
ている協同のプロセスを西田の言う〈純粹経験〉として感じ取ることにはできないが、〈場〉にお
ける個人間の相互作用によって時間的経過とともにどのような変化が全体の動きに生じている
かを観察し、そして、個人がそのプロセスをどう感じたかを反省的に記述したものを手がかり
にすることで、その〈場〉がどのような方向性を持ち、個人に対してどのような働きかけをし
ていたのかをある程度推察することができよう。一方で、こうした観察に伴う決定的な限界は、
客観的立場をとりながらも、〈場〉の存否とその作用に関し、質的、量的データによる〈解釈〉
はできてもその検証はできないということである。観察された現象と理論的な枠組みの間に整
合性が見られたとしても、両者の間に有意な相関があることの証明にはならない。また、記述
が予想された現象の存在を示唆するものではあったとしても、その詳細な経過や、個人が実際
に現場に臨んでどのような力学の元に置かれていると感じているかは、たとえ参与観察の形を
とったとしても当事者と同等の〈場〉との関係に基づいた視点からは、論じることは叶わない
であろう。

これらを勘案し、特定の〈場〉の研究法としては、理想的にはこれら二通りのアプローチを
両方取り入れながら、交互に立場を変えてその特質を論じることが考えられる。内部のプレー
ヤとして〈場〉のはたらきを見る立場には、個人間の関係のダイナミズムとその効果としての
自己の心理、生理的变化を直接的に描写する利点を与えられ、外部からの観察では、〈場〉の全
体像とその外部の環境との関係が客観的に観察され得るという利点がある。いずれにせよ、今
後の〈場〉に関する研究に当たっては、上述の問題をいかに解決するかに加え、科学としての
〈場〉の研究を確立するうえで研究対象となる〈場〉の定義の共有と、〈場〉の働きを表現する
ための客観的パラメータをいかに見出すかが喫緊の課題である。

【注釈】

- (1) 露木（2003）によれば、近代の機械論的自然観に基づく空間の概念においても〈場〉（field）という考え方は存在した。例えば、万有引力の法則では、ある質点に働く力は三次元的な位置の関数として与えられるが、一般に（引力などの）ある物理量が一定の空間領域にわたってその位置の関数として与えられるとき、その物理量は〈場〉として記述され、質量を持つ物質と区別される。ただし、これは〈場〉よりも質量を持つ物質の方がより本質的であるという二元論的立場に立った考え方であり、〈場〉は物理現象を説明するための従属的意味しか持っていない。（p.16）
- (2) ただし、こうしたファラデー、マクスウェルの〈場〉も「エーテル」という物質間の空間を埋めるべき媒介を前提とするものであった（中村 1989）という意味で、ニュートンの世界観を引きずっていた。
- (3) 例えば、レヴィンは青年に特有な、イデオロギー的変更に伴う安易に極端な行動へ走る傾向を、成人に比べた認知的〈場〉の未分化故と説明している。（Lewin, 1951, p.141）
- (4) 河合（1976）はユング心理学の立場から、無意識内にある原型的作用のうち、父性原理と母性原理を相対するものとして挙げ、前者が（善悪、主客などを）区別し「切断」する機能を象徴するのに対し、後者はすべてのものを平等に「包含」する機能を象徴するとした。

【参考文献】

- Burke, W. W. (1994). *Organization development; A process of learning and changing*. Reading, MA: Addison-Wesley.
- フクヤマ, F. (1996). 『「信」なくば立たず』(加藤寛 訳) 東京: 三笠書房
- Geertz, C. (1973). *The interpretation of culture: Selected essays*. New York: Basic Books.
- 井出祥子 (2006). 『わかまえの語用論』 東京: 大修館書店.
- 伊丹敬之 (2000). 「場のマネジメント: 概説」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編. 『場のダイナミズムと企業』(pp.13-44). 東京: 東洋経済新報社.
- 伊丹敬之 (2005). 『場の論理とマネジメント』 東京: 東洋経済新報社.
- 角田幸彦 (2001). 『景観哲学への歩み』 東京: 文化書房博文社.
- 加藤孝義 (1971). 「認知の体制化について (II): 知覚理論の展開 (2): 現代知覚諸理論」. 『Artes liberales, 第7号』(pp.11-42). 岩手大学人文社会科学部.
- 河合隼雄 (1976). 『母性社会日本の病理』 東京: 中央公論社.
- 小坂国継 (2002). 『西田幾多郎の思想』 東京: 講談社.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: selected theoretical papers* 猪股佐登留 訳 『社会科学における場の理論 増補版』 東京: 誠心書房.
- 三戸 公 (1994). 『「家」としての日本社会』 東京: 有斐閣.
- 三輪敬之 (2000). 「共創における生命的コミュニケーション」清水博編『場と共創』(pp.273-397) 東京: NTT出版.
- 三宅美博 (2000). 「コミュニケーションと共生成」清水博編『場と共創』(pp.339-398) 東京: NTT出版.
- 中村雄二郎 (1989). 『場所 (トポス)』 東京: 弘文堂.
- 中村雄二郎 (2000). 『共通感覚論』 東京: 岩波書店.
- 中村雄二郎 (2001). 『西田幾多郎 I』 東京: 岩波書店.
- 中根千枝 (1967). 『タテ社会の人間関係』 東京: 講談社.
- 新村 出 (編) (2008). 『広辞苑 第六版』 東京: 岩波書店.
- 西口敏宏 (2000). 「場への学際的接近」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編. 『場のダイナミズムと企業』(pp.65-96) 東京: 東洋経済新報社.

- 西口敏宏・ボーデ, A. (2000). 「場と自己組織化：アイシン精機火災とトヨタ・グループの対応」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』(pp.97-124). 東京：東洋経済新報社.
- 西田幾多郎 (1927). 「場所」大橋良介 (1998) 編『西田哲学選集 第四巻「現象学」論文集』(pp.88-159). 京都：燈影社.
- 西田幾多郎 (1946). 「場所的論理と宗教的世界観」『西田幾多郎キーワード論集』(pp.20-76). 東京：書肆心水
- 野中郁次郎・紺野 登 (1999). 『知識経営のすすめ』東京：筑摩書房.
- 野中郁次郎・紺野 登 (2000). 「場の動態と知識創造：ダイナミックな組織知に向けて」伊丹敬之, 西口敏宏, 野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』(pp.45-64) 東京：東洋経済新報社.
- Nonaka, I., and Takeuchi, H. (1995). *The knowledge creating company: How Japanese companies create the dynamics of innovation*. New York: Oxford Press.
- Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension*. 高橋勇夫 訳『暗黙知の次元』東京：筑摩書房.
- 佐伯 守 (1999). 『〈場所的〉ということ：ドゥルーズ／西田幾多郎を読む』東京：晃洋書房.
- 佐藤直樹 (2004). 『世間の目』東京：光文社.
- 清水 博 (1978). 『生命を捉えなおす』東京：中央公論社.
- 清水 博 (1996). 『生命知としての場の論理：柳生新陰流に見る共創の理』東京：中央公論社.
- 清水 博 (2000). 「共創と場所：創造的共同体論。」清水博編『場と共創』(pp.23-178) 東京：NTT出版.
- 菅原健介 (2005). 『羞恥心はどこへ消えた?』東京：光文社
- 露木恵美子 (2003). 『場と知識創造』北陸先端技術大学院大学博士論文.
- 上田閑昭 (1998). 『西田哲学への導き：経験と自覚』東京：岩波書店.
- Weisbord, R. M. (1987). *Productive workplaces: Organizing and managing for dignity, meaning, and community*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.